

最後の『新潮45』

休刊に追い込まれた『新潮45』10月号。図書館でざっと読んだ。「野党」百害という特集とともに、特別企画「そんなにおかしいか『杉田水脈』論文」に注目した。

リードから—8月号の特集「日本を不幸にする『朝日新聞』」の中の本、杉田水脈氏の「『LGBT』支援の度が過ぎる」が、見当はずれの大バッシングに見舞われた。主要メディアは戦時下さながらに杉田攻撃一色に染まり、そこには冷静さのカケラもなかった。

あの記事をどう読むべきなのか。LGBT当事者の声も含め、真つ当な議論のきっかけとなる論考をお届けする。

最初に登場するのが、新しい歴史教科書をつくる会副会長の藤岡信勝氏。「誤読され言葉狩りのターゲットとなった『生産性』という言葉は、本来、どう読まれるべきだったのか」と。尾辻かな子議員、竹内久美子氏の批判、上野千鶴子氏の「再生産論」を取り上げ、「生産性」という言葉の使用に論究する。そして最後に、「批判を恐れずに勇氣をもって正論を主張する国会議員の存在は貴重であり、有権者はそれを正しく評価しなければならない」と、杉田氏を持ち上げる。

それに続く文藝評論家の小川榮太郎の論考は、支離滅裂であり、もっと酷い。政治は「生きづらさという主観を救えない」というタイトルで「LGBTの問題など、国家や政治が反応すべき主題ではない。文学的な、つまり個人的、人生的な主題なのだ」「性的嗜好ついてあからさまに語るのは、端的に言って人迷惑である」と。紹介するのも躊躇するが、こんな酷いことまで述べている。

「満員電車に乗った時に女の匂いを嗅いだら手が自動的に動いてしまう。そういう痴漢症候群の男の困苦こそ極めて根深ろう。再犯を重ねるのはそれが制御不可能な脳由来の症状だという事を意味する。彼らの触る権利を社会は保障すべきではないかのか。触られる女のショックを思えというのか。それならLGBT様が論壇の大通りを歩いている風景は私には死ぬほどショックだ、精神的苦痛の巨額の賠償金を払って口を利いてくれと言っておく。」

痴漢をする権利を保障せよ、と恥ずかしくもなく述べている。新潮編集部は、こんな酷い「論文」まで、「真つ当な議論のきっかけとなる論考」と考えていたのか。それを説明せず、『新潮45』は休刊となった。なにも説明責任を果たさずに休刊してしまい、新潮社はもっと慎重に対処すべきであった。



(2018年10月5日)